

## 「五・七・五」の魅力

生徒の皆さんは、これまでにいろいろな文学と出会っていることと思います。その中の一つ、俳句に興味を抱いたことはないでしょうか。私は俳句について関心を持っています。

俳句は短い定型詩としてよく知られていますが、その魅力は、「五・七・五」の僅か十七音の中に詰められた作者の想いや自然描写などが凝縮されているところにあるように思います。また、短い詩型ゆえに、鑑賞する側が自由に想像を膨らますことができることも魅力の一つであると考えます。海外にも大勢の愛好者がいらっしゃると言われています。

さて、個人的な思いに他なりません、無数の俳句（あるいは俳諧）の中から好きな俳句をいくつか挙げてみたいと思います。

「古池や蛙飛び込む水の音」（松尾芭蕉）

「おもしろうてやがて悲しき鶴舟かな」（松尾芭蕉）

「菜の花や月は東に日は西に」（与謝蕪村）

「五月雨や大河を前に家二軒」（与謝蕪村）

「朝顔に釣瓶つるべとられてもらひ水」（加賀千代女）

「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」（正岡子規）

「金亀こがねむし虫なげう擲つ闇の深さかな」（高浜虚子）

「桐一葉日当りながら落ちにけり」（高浜虚子）

「校塔に鳩多き日や卒業す」（中村草田男）

「降る雪や明治は遠くなりけり」（中村草田男）

申すまでもなく、これらの俳句（あるいは俳諧）の作者はすべて著名な俳人であり、作品の多くが教科書などにもよく取り上げられているようなものばかりです。よって、私のような素人が軽々にふれることなどできないものと理解しております。ただ、それを敢えて承知で、また誤った捉え方になることを覚悟の上で感じたままを短い言葉にしてみますと、「静寂」、「哀愁」、「壮大」、「寄り添う」、「優しさ」、「旅情」、「驚き」、「秋の訪れ」、「安堵」、「寂しさ」……。このようなことがそれとなく頭に浮かんできます。

蛇足ですが、二十代の頃、たまたま新聞に俳句を投稿したところ、幸運にも取り上げていただいたことがありました。「稲刈りの終わりでもとの老いし母」しかし、その後何度か俳句を作ってみました、今もこれを凌ぐものはできません。俳句は確かに魅力的ですが、一方で、とても奥が深いと感じています。